

第3 教師としての律法

【暗唱聖句】

「あなたは心を尽くし、魂を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい」申命記 6:5

【日曜日・神を愛すること、畏れること】

「…仮庵祭に、主の選ばれる場所にあなたの神、主の御顔を拝するために全イスラエルが集まるとき、あなたはこの律法を全イスラエルの前で読み聞かせねばならない」申命記 31:10、11

モーゼは、祭司およびイスラエルの全長老に対して、仮庵際が行われるとき律法の全イスラエルの前で読み聞かせるように命じました。現代のように自由に聖書を読むことができなかった時代に、年に一度の祭りにおいて全イスラエルが一同に会する機会を用いて、聖書を読み聞かせました。その際に選ばれた箇所は、律法について記された箇所でした。その理由は、「彼らが聞いて学び、あなたたちの神、主を畏れ、この律法の言葉をすべて忠実に守るため」(申命記 31:12) でした。小さいときから神を畏れるということを教えなければ、神を畏れることを知らずに育ってしまうことでしょう。また聖書を読み学ばなければ、御言葉が何と言っているかわかりません。そして神を畏れるからこそ、神の言葉を守るようになるのです。

神を畏れるとは、恐怖とは違います。それは畏敬の念です。神は人知を遥かに超えた偉大な存在であることを認め、すべての中心におられることを認め、自分が存在しておるのも神のおかげであることを認めることです。人間の力を超えた圧倒的な存在であり、見ると死んでしまうと言われています。それゆえ恐怖を抱くことは自然なことです。しかし、そのような圧倒的な方が、父のように私たちを愛し、守り、導いてくださっているのです。それゆえ恐怖の思いを、感謝と愛の思いが上回るのです。

【月曜日・あなたに対する証言】

モーゼは死の直前、神様から約束の地に入ったイスラエルの民が、「すぐに外国の神々を求め、神様を捨てて、契約を破る。それゆえ多くの災いと苦難が襲うであろう」(申命記 31:16) ことが示されます。そこでモーゼは神様の御心を後任に託すべく、この神様から将来起こる預言を歌にしてイスラエルの人々に教えます。災いが実際に及んだ時に、このモーゼが残したこの歌によって、災いの理由を彼らは知るのでした。

ところで、モーゼの歌と呼ばれるものには二つあり、一つは出エジプト記 15 章に出てくるエジプトから脱出できたことを喜び感謝する歌であり、もう一つがこのカナンの地に入った後起こることをの預言です。また、黙示録 15 章 3 節には、迫害に勝利した人々が、「神の僕モーゼの歌と小羊の歌とをうたった」と出てきます。モーゼの歌が当時のイスラエルだけでなく、後世の人々にまで意味のある歌であることがわかります。

また、「モーゼは、この律法の言葉を余すところなく書物に書き終える」(申命記 31:24) と、モーゼは主の契約の箱を担ぐレビ人に、「律法の書を取り、あなたたちの神、主の契約の箱の傍らに置き、あなたに対する証言としてそこにあるようにしなさい」(申命記 31:26) と命じます。律法の書とは、申命記だけでなく、創世記から申命記までのいわゆるモーゼ 5 書のことを言いますが、それをついに書き終えて、単なる書ではなく神様からの証言として、いつも民たちの前にあるようにさせたのでした。

【火曜日・あなたは成功する】

「ただ、強く、大いに雄々しくあって、わたしの僕モーゼが命じた律法をすべて忠実に守り、右にも左にもそれではならない。そうすれば、あなたはどこに行っても成功する。この律法の書をあなたの口から離すことなく、昼も夜も口ずさみ、そこに書かれていることをすべて忠実に守りなさい。そうすれば、あなたは、その行く先々で栄え、成功する」ヨシュア 1:7、8

成功や繁栄の秘訣を知りたいければ、このヨシュア 1:7、8 を見れば明かです。それは「モーゼが命じた律法をす

べて忠実に守り、右にも左にもそれない」ことです。この世の人が考える成功の法則とはまるで異なることでしよう。この世では、能力や運、努力、環境など様々な要素が成功するために必要だと考え、逆に成功できなとすれば、これらのものがないからだと言いついにするのではないのでしょうか。しかし、聖書は律法を忠実に守り、そこからそれなければ、能力も運も努力も関係がなく、どのような場所で、どのような生き方をしようとも成功と繁栄を約束しているのです。

しかし、ヤコブ 2:10 にあるように、「律法全体を守ったとしても、一つの点でおちどがあるなら、すべての点について有罪とな」ります。また、黙示録 12:17 では、「竜は女に対して激しく怒り、その子孫の残りの者たち、すなわち、神の掟を守り、イエスの証しを守りとおしている者たちと戦おうとして出て行った」とか、黙示録 14:12 では、「ここに、神の掟を守り、イエスに対する信仰を守り続ける聖なる者たちの忍耐が必要である」と教えています。つまり、律法に対して右にも左にそれずまっすぐに歩むなら成功の道は約束されているのですが、それが簡単ではないということも教えているのです。

【水曜日・律法を守る者たちの苦闘】

「ヒゼキヤはユダの全土にこのように行い、自分の神、主の御前に良い事、正しい事、真実な事を行った。彼は神殿における奉仕について、また律法と戒めについて、神を求めて始めたすべての事業を、心を尽くして進め、成し遂げた」歴代誌下 31:20、21

ヒゼキヤはアハズ王の後をついで 25 歳でユダ王国の王となり、紀元前 715 年あるいは 716 年から 687 年までの約 30 年間もの間統治します。歴代のユダ王国、イスラエル王国の王の中でも、敬虔な王として讃えられる数少ない王の一人と言われています。彼の父親の時代に盛んであった偶像崇拜の払拭に務め、主の御前に正しいことを行っていきます。ヒゼキヤがこれらの真実な事を行った後、バビロン軍やエジプト軍を鎮圧したアッシリアの王センナケリブが攻めこんで来ます（歴代誌下 32:1）が、主の使いがアッシリアの陣営の 18 万 5000 人を殺害したとされています。最後の 14 年の治世もは事も無く過ぎ、死にあたってはすべてのユダとイスラエルの住民が敬意を表したとされています。

この物語は、聖書の教えに忠実に生きるものたちを、主が必ず守って成功と栄光をもたらしてくださることを教えています。しかし同時に、災いや困難を許されることがあるということも教えています。バプテスマのヨハネが殺されてしまったり、ヨブの苦難なども同様です。主に忠実に生きていたのになぜなのかと疑問をいだかせます。私たちにはすべてはわかりませんが、しかし彼らは決して主から見捨てられたのではなく、主の御手は常にそこにありました。この世の成功と主が考える成功とが異なることは、しばしばあることです。そして、主のご計画は遥かに素晴らしく最善なのです。だとするなら、すべてを主に委ね、受け入れる他ありません。

【木曜日・私たちの模範イエス】

第一ヨハネ 2:6 には、「神の内にもいつもいると言う人は、イエスが歩まれたように自らも歩まなければなりません」と教えられています。イエス様は私たちの模範です。では、イエス様は人として、どのように歩まれたのでしょうか。すると、次のような聖句があるのを見て驚かされるのです。

「キリストは御子であるにもかかわらず、多くの苦しみによって従順を学ばれました」ヘブル 5:8

なんとイエス様は何でも初めから完全にできたのではなく、多くの苦しみを通して、従順を学ばれたと書かれているのです。そして、このような学びの積み重ねが、最後の「へりくだって、死に至るまで、それも十字架の死に至るまで従順」(フィリピ 2:8) だったということにつながって行くのです。十字架の死に向かって歩む道は、主の御心であり、イエス様は最後まで従順でした。イエス様はこう言われます。

「わたしをお遣わしになった方は、わたしと共にいてくださる。わたしをひとりにはおかれぬ。わたしは、いつもこの方の御心に適うことを行うからである」ヨハネ 8:29

主に従順に生きるとき、主は共にいて下さることはわかります。